

〇〇してみました世界のフィールド

フランス国立映画センターのアーカイブス

そのだ なおこ
園田 直子
民博 民族社会研究部



1パリを囲む要塞に入ってみました

セーフティーフィルムを収蔵する建物の内部。筆者の横は、CNCアーカイブスのエリック・ルロワ氏（撮影・大森康宏）

1870年の普仏戦争の教訓から、パリの周辺にはその後、多くの要塞が造られた。そのうちのひとつ、パリ南西20キロメートルのボワ＝ダルシーには、1969年、ときの文化大臣アンドレ・マルローにより国立映画センター（CNC）のアーカイブスが作られた。

フィルムをまもる

国立映画センター（CNC）のおもな業務は、フィルムの収集（国家への納品、寄贈、購入など）、目録作成、保存、修復であり、近年はデジタル化に力をいれている。センターは、ドキュメンタリー、フィクション合わせて二万点のフィルムを所蔵しており、「このうち「ルミエールの映画」のオリジナルフィルムは二〇〇四年にユネスコの記憶遺産に登録された。

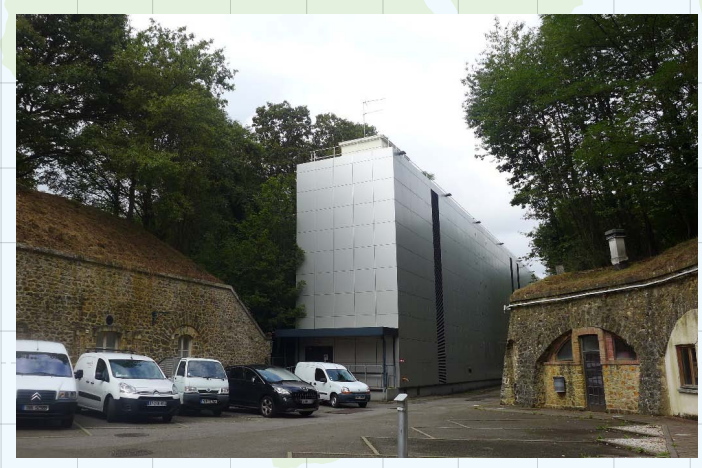


ボワ＝ダルシーの要塞にある国立映画センター（CNC）アーカイブスの入口

フィルムの素材には、ニトロセルロース、アセテートセルロース、ポリエチレンテレフタレート（ペットボトルと同じPET）などがある。センターのニトロセルロースフィルムのコレクションは世界でも五本の指に入る（ヨーロッパでは「二をあらそう」規模ということである。ニトロセルロースは爆発・燃焼の危険性を伴うため、温度八度、相対湿度二五パーセントに厳格に管理されたコンクリート製の専用保管庫に小分けされている。外気温が三〇度を超える日は、保管庫からフィルムを取り出すことはしない。各保管庫にはそれぞれ出入口が一方所設けられており、万が一の場合にはどちらからでも避難できるようにしてある。また、天井には炎を逃がすための窓、ドアの下には空気が入替える隙間が設けられている。ニトロセルロースフィルムの保管庫は二四時間体制で監視されている。

デジタル化の要望が出たフィルム、あるいは広報普及のために選ばれた作品である。なお、センターではこのほか、映画制作者からの申請をもとに、映像文化遺産のデジタル化助成をおこなっている。一三名の委員で構成される委員会が助成の可否を決定しており、企業の規模によっては、デジタル化は無償でおこなうとのことだった。センターで実施するデジタル化は、保存修復と対となる活動である。研究者や専門家に活用してもらうため、広報普及と利用するためのデジタル化といえる。

施設の説明をしてくださったエリック・ルロワ氏は、何度も「フィルムへの復帰」の原則ということばを口にしてきた。例えば修復後のフィルムは必ず三五ミリのセーフティーフィルム（PET）に移しかえて保存しているとのことだった。デジタルデータは、データを納める媒体の寿命からたえず移し替えが必要となる。一方、フィルムは適切な温度・湿度環境で保管すれば、PETならば五〇年もつといわれるように、その寿命ははるかに長いからだ。今は、デジタルポールの映像の時代である。それでも、いやそれだからこそ、フランス国立映画センターではモノとしての映像を保存するために、アナログフィルムへの回帰が選ばれている。



中央の建物がセーフティーフィルムの収蔵庫。ひとつの建物には、12万巻のフィルムが収蔵できるという



手前の出入口からみたニトロセルロースフィルム専用保管庫の内部。奥に、ふたつめの出入口がみえる（撮影・大森康宏）

が進んでいるため、フィルムのコピーは最大三セットに限定し、過剰分のフィルムを整理することであらたな収蔵スペースを確保している。ちなみに、CNCでは、ニトロセルロースフィルムは赤色、セーフティーフィルムは緑色の容器に入れ、ふたの色はポジフィルムでは白色、ネガフィルムでは黒色と区別している。

デジタル化とフィルムへの復帰

七〇〇本以上のフィルムのデジタル化が終了しており、これらは研究者や専門家に公開されている。デジタル化されるのは、劣化の進んだフィルム、権利承継人から

★
フランス、ボワ＝ダルシー